

青年期発達障害者の内面世界を大切にしたい支援(5)

自立につなげるライフステージに応じた自己理解・自尊感情を高める実践

企画者	片岡美華 小島道生	(鹿児島大学教育学系) (筑波大学人間系)
司会者	小島道生	(筑波大学人間系)
話題提供者	川田真帆・小久保博幸 片岡美華 尾川周平 (埼玉県立毛呂山特別支援学校／筑波大学大学院人間総合科学学術院)	(鹿児島大学教育学系)
指定討論者	別府哲 水内豊和	(岐阜大学教育学部) (富山大学教育学部)

KEY WORDS: 発達障害, 自己/他者理解, ライフステージに応じた支援

【企画趣旨】

本シンポジウムは、これまで自尊感情、自己理解、セルフアドボカシー、家族等の周囲に対する支援、知的障害児への自己・他者理解の授業実践等を取り上げてきた。これらを通して、当事者への直接的な、また間接的に内面世界へとつながる支援の在り方を追究してきている。本年度は、シリーズの集大成として発達障害者の自己理解や自尊感情を高める支援を小、中、高校といったライフステージに焦点をあて、実践・研究報告を行う。そして青年期発達障害者の自立を促す内面世界を大切にしたい支援の在り方について検討を図る。

【話題提供者の趣旨】

「書くこと」と「対話」を通して自己理解と他者理解を深める自立活動の指導；川田真帆（鹿児島大学教職大学院）・小久保博幸（鹿児島大学教職大学院）

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する高機能自閉症のある A 児（小 4）は、自分の特性について大まかな知識を獲得しており、必要な支援を求める力がついてきている。しかし特性を都合良く解釈し、苦手なことに取り組もうとしなかったり、自分に優位に事を進めようとしたりすることがあった。そのため、周囲の人に不信感や不快感を抱かせてしまうことになり、友だちと良好な関係を作ることが課題となっている。それらの行動は、失敗や他者からの否定・批判を回避しようとしたり、自分の特性（弱み）を理解しているが故に、理想と現実とのギャップに苦しんだりしていることによるものではないかと考えられた。そこで、多様な自己への気づきを促すことで自尊感情を高めたり、他者の気持ちに気付いたりすることができるよう、「書くこと」と「対話」を通して自分の姿を振り返る実践を行った。コミック会話やマインドマップ等の手法を活用して、A 児の内面を視覚的に示したり、それを用いて教師と対話したりすることを通して、自分の課題だけでなく良さや頑張りにも目を向けることができるようになり、自分を褒める発言が聞かれるようになった。また、自分にとって嫌だった出来事を相手の視点からも振り返ることで、他者の考えを尊重することを意識し、相手の言い分を耳を傾けたり言い方に気をつけて発言したりする姿が見られるようになった。なお、本実践の発表について保護者の同意・了承を得ている。

中学段階でセルフアドボカシースキルを獲得・行使する上で必要な視点と課題；片岡美華（鹿児島大学教育学系）

セルフアドボカシー（SA）とは、自らの障害や特性を理解し、必要な支援を他者に求める力である（片岡，2017）。合理的配慮が当事者からの要請に端を発することや、発達障害が周囲から理解されにくいことを考慮しても SA スキルを獲得・行使していくことは重要であると考え。そこで

自己理解と提唱力を核とした SA スキルを付けるための教育プログラムを開発し実践を行ってきた。小学生から高校生への実践を行ってきた中でとりわけ中学段階で意識したことは同年代間の関係性や進路選択であった。前者では、思春期が仲間関係の中で発達する時期にあることに加え、他者との違いをより意識し孤独を感じる時期でもあることが背景にある。後者では、発達障害という特性も絡み、進路選択の見通しの甘さや周囲の意見に流されやすい傾向がみられたことが契機である。そこで実践では、多様な考え方がわかるよう視覚化と語り合いを軸に他者理解を通して自己理解を進められるゲームなどをとりいれたり、多角的視点を伝え、スタッフと共に情報収集する中で進路の自己決定を促したりしてきた。本報告ではこれらプログラムの概要を伝えつつ、公表に同意済みの事例についても触れる。

ASD 者における自尊感情の様相；尾川周平（埼玉県立毛呂山特別支援学校／筑波大学大学院人間総合科学学術院）国内外における ASD 者の自尊感情の高低は、定型発達者よりも有意に低いという報告が一定数なされている一方で、ASD 者と定型発達者の自尊感情の高低に有意差はないという研究報告もある。また、定型発達者よりも ASD 者の自尊感情の高低は個人差が大きいことが示唆されており、自尊感情の支援が必要な ASD 者が一定数いると考えられる。本報告では、まずは ASD 者の自尊感情研究の到達点と課題について報告する。ASD 者の自尊感情研究の課題の 1 つとして、定型発達者の研究を中心に注目されつつある自尊感情の質に関して、ASD 者の実態がほとんど解明されていないことが明らかとなった。その結果を基にして、報告者が行った自尊感情の質に関する調査報告を行う。対象は ASD を伴う中高生 35 名、対照群は同年代の中高生 362 名として、質問紙調査を実施した。その結果、ASD を伴う中高生と同年代の中高生の自尊感情の質に有意差はなかった。ただし、本報告における自尊感情の質はあくまでもその一端であり、今後の研究で定型発達者との相違が確認される可能性もあるため、更なる実態の解明が求められる。

【指定討論者の趣旨】

別府氏からは、知的障害者の内面世界や自己/他者理解、自尊感情に関する研究や発達心理学の知見を踏まえて各実践に対する指定討論を行って頂く。水内氏からは、自立を見越した幼児期から青年期のライフステージに応じた支援について各報告者への指定討論を行って頂く。

（文献）当日示す。

(KATAOKA Mika, KOJIMA Michio, KAWADA Maho, KOKUBO Hiroyuki, OGAWA Shuhei, BEPPU Satoshi, MIZUUCHI Toyokazu)